

## 発達 3 (215~221)

座長 天岩静子・小野寺淑行

- 215 推移律に及ぼす記憶能力と訓練方法の影響  
いわき短期大学 天岩静子
- 216 重さの保存の発達(2)  
——小学生と大学生の比較——  
尚綱短期大学 浜崎幸夫
- 217 焦点事例の違いが幼児の図形学習に及ぼす効果  
(その1) 千葉大学 麻柄啓一
- 218 焦点事例の違いが幼児の図形学習に及ぼす効果  
(その2) 東北大学 伏見陽児
- 219 日本語における命題判断と質問応答の比較  
お茶の水女子大学 仲真紀子
- 220 幼児の多元的系列化に及ぼす感覚・運動的手の効  
果  
熊本大学 小野寺淑行
- 221 Fuzzy 選言推論の分析  
東北大学 渡部諭

215 麻柄(千葉大)より、各テスト課題の満点は何点かとの質問があり、テストA, B(復唱と逆唱)は正答できた桁数、テストC, D, Eはそれぞれ6, 2, 4点との回答があった。杉浦(越谷保専)よりの、逆唱と言語による推移律間の正の相関は、心内的な位置の並べかえという共通のメカニズムの存在を意味するのとの質問に対し、5才児になると、逆唱と両方の推移律課題(具体的推移律と言語による推移律)間に高い相関がみられ、推移律を解く際、位置の並べかえ操作は必要な要素と考えられる旨、回答がなされた。

216 佐久間(玉川大)は、重さの保存が初めて教科書で扱われる時期の確認の必要性を述べ、次に、新田(東京女子大)、小森(京都女子大)より、「しゃがんでふんばっている時が一番体重が重い」という反応が多いのは、生氣論的判断(物理的な力以外の精神的力の影響とみなす)をするためではなく、ふんばる力が物理的に秤に作用するという理解、針の振れの大きさについての判断の個人差によるのではないかと質問があり、実際にはふんばっても物理的な力は作用していないのだから、物理的な力以外のものを考えてのことであろうとの回答があった。佐伯(東大)より、この姿勢は体重計の針を変えうる可能性が大で、この可能性を力あるいは重さとみなすためかもしれないが、これは前物理学判断とはいえ

るが生氣論的判断ではないと思われるとの意見に対し、大学生でもこの反応が多いことの意義を考えてみる必要があるが、実験結果は仮説を否定するものではないとの回答があった。

217・218 小野寺(熊本大)より、図形10の事後テストでの正答者数につき質問があり、if群8名、rf群0名との回答がなされた。松木(東北大)よりの、事後テストで頂点の数を数えた者がいたか、また頂点数を正しく計数しながら誤答するケースがあったかとの質問に対し、正答者は視線で頂点を追う者の方が多く、誤答者は、熟考せず即座に「わからない」と反応する者が多かった(特にrf群)旨回答があった。小野寺は、IF型焦点事例とテスト図形間の知覚的類似性に触れ、学習効果の中に知覚的類似性による影響が含まれていないか質問した。事後テストの結果からはその可能性はないとの回答があった。佐伯(東大)よりの、今後の研究方向として、unfamiliarな概念、人工的な概念に関する実験も必要であろうとの意見に対し、そのような方向ではなく、if群で成績の上昇しなかった者に対するより適切な焦点事例の系列化等を検討したい旨回答がなされた。

219 小森(京都女子大)より、命題の真偽判断と質問への応答の間に差を生じさせる根拠について仮説を持っているのか質問があり、質問の場合、質問文を命題に変換してから判断する過程を含むこと、及び答え手の側から質問者への側への視点の移行が、反応時間を遅らせるのではないかと回答があった。小野寺(熊本大)は、日本語での「はい」「いいえ」の使い分けは一義的に決定されるものか質問し、そうではない旨回答があった。

220 佐伯(東大)より、研究のねらいは何か、転移課題に別の種類の実験材料を用いてはどうかとの質問があり、ねらいは対象を同時に複数の基準により分類、系列化する心内的操作の水準をみることで、この操作の発達と対象の連言的表現の能力等の発達との関連性の追求にとって、この水準を高めるための訓練技法の開発が必要である旨回答がなされた。

221 新田(東京女子大)よりの、前提の前項、後項はどの部分をさすのかとの質問に対し、「AまたはBである」のAの前項、Bを後項と呼ぶとの回答があった。小森(京都女子大)より、まずFuzzy関数を定義し、Fuzzy membershipの決定方法を検討していく必要性が指摘され、現在考慮中であるとの回答がなされた。

(天岩静子・小野寺淑行)